

全巻揃った『奇縁まんだら』

鷹尾 奈津子

私が寂聴さんの作品でお気に入りなのは『奇縁まんだら』

シリーズである。寂聴さんが人生で出逢った偉大な作家や芸術家、数々の著名人とのお付き合いにまつわるエピソードや、寂聴さんだからこそ垣間見られたような、世間一般が思い描くイメージと異なるその人の一面を振り返っている内容になっている。運命か奇なる縁か、寂聴さんと縁が有って語られている人は総勢一三六人に及ぶが、長くお付き合いのあった人だけでなく、たった一度の出逢いでも感銘を受けた人のこともある。二〇〇七年から五年にわたり日本経済新聞に人気看板エッセイとして連載されていたものが四巻にわたり書籍化されている。

寂聴さんと年の差六十以上離れている私には奇縁まんだら

らシリーズに登場する人たちは教科書に登場するような歴史上の人物に近い。三島由紀夫さん、谷崎潤一郎さん、美空ひばりさんなど名前を知っているならよいほうで、どの世界で何をされていたのかわからない人も多い。それでも読んでみると寂聴さんの目線を通して、その人の姿や性格、意外な一面が浮かびあがってきて、生身の人間だったことを知り面白くなる。遠すぎない過去が、最近まで存在していた事実が気付く。

日本経済新聞より連載の話があったとき、寂聴さんは満八十四歳だったそう。寂聴さんがお亡くなりになる十五年前であるが、一三六人に共通しているのは、書かれた時

点で皆、寂聴さんより先にお亡くなりになっていることである。寂聴さんが親しかった人の最期に立ち会っているエピソードも多く、長生きすることで、親しかった人に先立たれてしまう淋しさも多いことを知る。作家や芸術家だけでなく、たくさんの人と積極的な交流をしてきた寂聴さんは、「生きるということは、日々新しい縁を結ぶことだと思う」と述べておられ、寂聴さんの人付き合いの極意も教えていただけたのであった。寂聴さんはチャンスがあれば自らつかみに行かれた。憧れの人と知り合える機会があれば、全ての用事をほったらかして向かうときもあったそうだ。奇なる縁も、自分のものとするかどうかは結局のところ自分の行動次第なのかもしれない。

奇縁まんだら全巻に登場する人のうち、一人だけ存命であったときに私も実際に目にした人がいた。生涯のジャーナリスト、筑紫哲也さんである。『奇縁まんだら続の二』で、寂聴さんは筑紫哲也さんを美食家で愛妻家の警世家と語り、最晩年は京都暮らしを好み、ご家族含め交流があったことを綴っている。私は、まさに筑紫さんが世間にがんを患っていることを公表し闘病していたその最晩

年に、筑紫さんが立命館大学で開講していた授業の聴講生として話を聞く機会を得ていた。私が見た筑紫さんは、テレビで見ていた印象そのままであった。闘病中ゆえ頭にニットののような帽子を身につけておられたが、目元がにっこりしていて、自身の病の状況すらもどこか興味の対象として話しておられ、余裕を感じさせる口調であった。

「明日への伝言」と名付けられた授業では、筑紫さんと交流のあった京都に縁のある著名人を招き、対談された。当時は全員ご存命であった鶴見俊輔さん、中坊公平さん、梅原猛さんと順に対談し、それ以後には寂聴さんとの対談も予定されていた。私はそのときを心待ちにしていたのだが、二〇〇八年七月の梅原猛さんとの対談を最後に筑紫さんは体調を崩されて、十一月に旅立たれてしまった。寂聴さんとの対談を目にすることは幻に終わったのであった。

筑紫哲也さんのことが書かれているのは奇縁まんだら三巻目であるが、長年、私はその内容を知らなかった。一卷にあたる『奇縁まんだら』は今も本屋に並んでいることもあるが、全巻が実店舗に並んでいることはあまりない。メルカリなどで見つけることはあっても状態の分からない

古本購入には抵抗があり、三巻と四巻を持っていなかったからである。けれども今夏、ついに全巻揃ったのである。

神戸に行く機会があつて訪れた横尾忠則現代美術館のミュージアムショップで、初めて新品で並ぶ奇縁まんだら全巻を見つけたのであつた。横尾忠則さんは奇縁まんだらシリーズに登場する人たちの肖像画を担当しており、その特徴をとらえた絵は新聞連載当初から読者の心もつかんで人気があつたそうで、書籍版の装丁にも使われている。本物の横尾忠則さんの絵を見たいと訪れた美術館で、探し求めていた本に出逢えたのは想定外の喜びで、筑紫さんのエピソードもついに読むことができたのであつた。

もう一人、江戸英雄さんにまつわるエピソードを紹介させていただきたい。今年五月、瀬戸内寂聴記念会主催の企画で私は寂庵を訪問させていただいた。そのとき、寂庵のお庭で新緑の木々のなか、白いカルミアの花が見事に咲いていた。訪れた人たちと一緒に見上げて印象的だったそのカルミアは、江戸英雄さんより贈られた木であつたと、三巻目の『奇縁まんだら 続の二』に書かれていた。江戸英雄さんは、経済界でのトップ実力者で桐朋学園の理事長も

つとめた凄腕文化人だそうだが、趣味の域を通り越した無類の土いじり好きの人だったようだ。テレビ番組の企画が縁で寂聴さんと交流が生まれ、一九八一年頃のある日、江戸英雄さん本人が寂庵のお庭にカルミアの木を運んで来られ、植える場所を選んだと本にはあつた。

主なき寂庵のお庭を彩っていたのは、寂聴さんが縁を結んできた人との交流で生まれた軌跡の花。筑紫さんのエピソードと同様に、ついに揃った奇縁まんだら全巻により、私のなかでも過去と現在のエピソードがつながっていったのであつた。